

5 支援体制の構築

(1) コンソーシアム（学校運営協議会）

令和元年度12月に、本校「魅力化推進協議会」を前身とする県下県立高校初の「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」を発足し、備前市・赤磐市・和気町を本校の地域と捉え、各自治体の首長と教育長、商工会議所や商工会、PTA、同窓会それぞれの長や大学教授など各界の代表15名の方に委員を委嘱している。この3年間の研究指定では、組織の実効性を伴わせるために、下部組織として小中高接続、産学官連携、高大接続という3つの部会を置いた。

●目的・目標

保護者や地域住民等が委員となり、学校運営や運営への必要な支援に関する協議をする。地域に根差した教育活動を円滑に行えるよう、コンソーシアムを活用して地域資源（人・モノ・カネ・情報）の協力支援を求める。

●内容

メンバー（五十音順、敬称略）

内山 登	岡山県立和気閑谷高等学校同窓会 会長
川上 健二	和気商工会 会長
草加 信義	和気町 町長
國友 道一	特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会 理事長
小林 雅代	岡山県立和気閑谷高等学校 P T A 会長
高旗 浩志	岡山大学教師教育開発センター 副センター長 教授
寺尾 俊郎	備前商工会議所 会頭
土井原 康文	赤磐市教育委員会 教育長
徳永 昭伸	和気町教育委員会 教育長
友實 武則	赤磐市 市長
中原 哲哉	赤磐商工会 副会長
藤岡 隆幸	岡山県立和気閑谷高等学校 校長
松畑 熙一	備前市教育委員会 教育長
横山 忠彦	備前東商工会 会長
吉村 武司	備前市 市長

スケジュール

日	行事	内容（主な議事）
7月書面	第1回会議	・学校経営計画と予算の承認 ・スクールポリシーの策定について
12月21日	第2回会議	・一人一台端末活用場面の授業参観 ・学校評価中間報告
3月25日	第3回会議	・学校関係者評価 ・次年度の学校経営計画

第1回会議 <スクール・ポリシーの策定について主な意見>

- ①これからの地域社会にいてほしい人間像：地域社会・課題への関心を持つ、主体的に関わる、変化への適応力や、柔軟性がある、他者への寛容、貢献の姿勢をもつ、協働できる、自分を大切にする、自己肯定感
- ②高校卒業時点までに育ってほしい人間像：学習する人、学習意欲を持つ、思考・判断力、問題解決力（への意欲）、社会性（社会規範意識、社会／地域参画意識）、自己の尊重、個性の確立、レジリエンス

第2回会議 <学校経営計画の中間評価について主な意見>

- ・特別な支援を必要とする中学生保護者のニーズは高く、高校教育で選択肢の受け皿を増やしてほしい。少人数授業で個に応じた教育をしていることをしっかり発信してはどうか。
- ・出口対策が入学対策になるという視点が弱い。出口の仕組みを作り、宣伝してはどうか。
- ・戦略が大事。他校の実例など、みんなで語り合えるような、みんなで前に行けるような会議に変えた方が良い。また、様々な立場の委員から意見を引き出せるような会議に。
- ・学校をよくするためには生徒も他から見られているということは気にしなければいけない。生徒の姿を見て、ここに入りたいと思う子どもが増えなければ意味はない。
- ・丁寧な対応が社会全体で求められている。放課後の補習や、励ましの声かけ、面談の繰り返しといった丁寧な指導をアピールしてはどうか。
- ・色々なところに和気閑谷高校が頑張っていることを宣伝したい。資料を見ると着実に成果は上げている。どのように成果を上げたかという分析が必要。
- ・「中学時代には前面に出られなかった生徒が活躍できる」という場面が、総合的な学習の時間も含めてある。
- ・ICT活用の授業見学をして、本時の目標が示されて、問いをもとに意図した授業をしている。先進校として、和気閑谷モデルを示してほしい。

●検証（取組による成果と課題）

2市1町を中心とした学校運営協議会の設置やコーディネーターの配置により、地域の様々な資源とつながる魅力的なカリキュラムづくりを行うことができた。その結果、生徒の主体性・自己肯定感の上昇がアンケート結果からも見られる。（「7つのチカラアンケート」、「高校魅力化評価システム」より）

その一方で、学校運営協議会をさらに有機的に運営することや、コーディネーターの雇用維持、関わりの強化を行い、魅力的なカリキュラムの継続・改善をはかって、地域・学校・生徒・保護者などステークホルダー全体の満足度を向上させていくことが課題である。

近年、生徒数の減少という問題に直面しており、本校で学ぶことの魅力を地域にどう伝えていくかが問われる。コンソーシアムを核に、学校と地域が一体となり、まずは現在在学している生徒の生き生きとした学びと進路保障に尽力し、本校が地域にとってなくてはならない学校であるという証明を、生徒の姿から発信していきたいと考える。より地域に密接した活動を続けて、地域ニーズを反映した、選ばれる学校にしていきたい。

(2) 小中高接続部会

●目的・目標

- ①小中高の 12 年間で地域が抱える課題に向き合い、定期的にその課題解決について深く考える習慣を身につけることで、将来的に持続可能なまちづくりに貢献できるリーダーを育成する。
- ②様々な校種の生徒と交わり、活発な意見交換を行い、考えを一つにまとめようとする過程を通して論理的思考を身につける。
- ③教育課程外に、和気閑谷の高校生が学びの機会や出会いの交差点となり、小・中学校と地域の方々との交流の場を提供、斡旋する。

●内容

メンバー（順不同、敬称略）

和気町立和気中学校校長	藤原 文明	和気閑谷高校校長	藤岡 隆幸
和気町立佐伯中学校校長	松井 啓子	教 頭	久常 宏栄
赤磐市立桜が丘中学校校長	村松 敦	事 務 長	神田 明夫
赤磐市立吉井中学校校長	青山 利明	主幹教諭	福田 浩司
備前市立三石中学校校長	小郷 康弘	企画主任（教諭）	安東 真美
備前市立吉永中学校校長	木村 俊一	部会主担当（教諭）	柴谷 祐人
和気町立和気小学校校長	森 尚紀	地域協働学習実施支援員 （支援職員）	松穂 亜花音

スケジュール

日	行事	内容（主な議事）
5月13日	第1回小中高接続部会	・委員の紹介及び本年度の活動予定 ※オンライン開催
12月24日	第2回小中高接続部会	・本年度の活動報告と来年度以降へ向けた提案、意見伺い ※書面開催
3月2日	第3回小中高接続部会	・来年度以降の在り方のブラッシュアップ ※オンライン開催

I 生徒間交流

① 部活動交流ーバスケットボール部

【1日目 7月30日(金)、2日目 10月30日(土)、3日目 11月13日(土)】

場 所：和気閑谷高等学校

参加者：和気中学校生徒 15名程度 和気閑谷高等学校生徒9名

伊里中学校生徒 6名 ※3日目のみ参加

② 放課後学習支援(継続実施)

佐伯中学校 【5月12日(水)～12月22日(水)までに計5回】

和気中学校 【6月28日(月)～12月13日(月)までに計8回】

場 所：佐伯中学校、和気中学校

II 教員間交流

① 出前授業の実施

10月20日(水) 場所：桜が丘中学校

対象：中学3年生

科目：商業

10月21日(木) 場所：桜が丘中学校

対象：中学2年生

科目：商業・日本史

12月3日(金) 場所：佐伯中学校

対象：中学2年生

科目：商業



●会議での意見

① 学校間交流に活用できそうな地域行事または学校行事を教えてください。

陸上運動講習会、文化祭・体育祭への小中学生の招待(販売の参加)、さえき夏祭り、マナー講座、高校生と語る会、マラソン大会、放課後学習、入試前の面接指導、「新聞」を使った出前講座、地域学・閑谷學の出前講座、各部活動の指導講座、「総合的な学習の時間」における単元「キャリア探究」、リーダー研修会(できれば企画から)、さくら祭、西地区各丁目ごとの秋祭り、吉永サマーフェスタ

② ラインナップとして希望される講座やワークショップなどを教えてください。

各校の教員の相談先のリストを作成による気軽な電話(教材研究の相談等)、面接指導、商業系の授業、総合学習「キャリア探究」、地域行事へのリソース・ノウハウのサポート

その他意見

- ・土日など休日に、小中学生を和気高に集め、高校生が指導する。
- ・対象とする「地域」を広げて検討できないか。たとえば、和気と赤磐の地域おこし協力隊員がコラボできると、新たな活動を創造できる。

(3) 産学官連携部会

●目的・目標

「産学官連携部会」は「恕」の精神を持って地域と協働する探究人の包括的育成を目指して、地域振興の担い手育成に向けた実践と和気高版デュアルシステムカリキュラム開発を2つの柱として指定後3年目の活動を行う。

●内容

メンバー（順不同・敬称略）

備前市市長公室企画課長	桑原 淳司	和気閑谷高校校長	藤岡 隆幸
備前市教委教育部文化振興課長	畑下 昌代	教 頭	久常 宏栄
備前商工会議所専務理事事務局長	西角 友彰	事 務 長	神田 明夫
備前東商工会支援課長	石井 宏幸	主幹教諭	福田 浩司
赤磐市総合政策部政策推進課主査	直原 真弓	企画主任（教諭）	安東 真美
赤磐市教育委員会学校教育課長	家森 康彰	部会主担当（教諭）	赤島 真一
赤磐商工会事務局長	竹並 義人	カリキュラム開発等専門家	梅村 竜矢
和気町まち経営課長	寺尾 純一	カリキュラム開発等専門家	江森真矢子
和気町教委社会教育課長	鈴木 健治		
和気商工会支援課長	出射 弘貴		
NPO 和気サンシュユの会理事長	定國 誠也		
和気金融協議会長	太田 実		

スケジュール

日	行事	内容（主な議事）
6月25日	第1回産学官連携部会	「地域協働探究」について（就業体験実習の見学）
11月30日	第2回産学官連携部会	「地域協働探究」について（授業見学）
3月4日	第3回産学官連携部会	3年間の産学官連携部会の取組の総括 ※オンライン開催

第1回産学官連携部会

(ア) 科目「地域協働探究」の就業体験実習先見学

参加委員11名が2班に分かれて町内実習先3箇所を巡回した。

(イ) 座談会

- ・今年度の産学官連携部会の在り方
- ・新科目「地域協働探究」について
- ・2年次生の就業体験実習について
- ・閑谷學（1年次バスツアー等）について

第2回産学官連携部会

(ア) 科目「地域協働探究」の授業見学 場所：3-1、3-2の各HR

(イ) 座談会

- ・和気閑谷高校の現状について
- ・今年度の活動報告
- ・今年度の進路状況（主として就職について）
- ・今後の展望

●検証（取組による成果と課題）

- ・探究活動や課外活動等を通して地域と協働するために必要な資質、能力が身についた。
- ・地域振興の担い手育成に向けた取組ができた。
- ・体験型の学びを通して様々な自信を身につけた。（体験を経験に変える力）
- ・企業経営者との対談、海外からの技能実習生との交流を通して大人の考え方や異文化に関する知識も身につけることができた。
- ・1年次生のバスツアーでは、グループワークやフィールドワークに取り組み、地域（和気町、赤磐市、備前市）のことを知る体験ができた。
- ・コロナウイルス感染症の拡大により十分な実習に取り組むことはできなかったが、オンラインをとおして様々な職種で仕事をしている方々との話し合いの場を設定できたのはよかった。また、外部での実習に代わり校内就業体験を行った。生徒は校内にもいろいろな仕事があることを知ることができた。
- ・特に「地域協働探究」選択者は、地域の方、企業の方のお力添えをいただきながら対人関係能力を育むことができた。また、振り返りの時間では、違う企業に行った生徒同士が話しをする時間を設けた。ある生徒の「命がけで働いた」と言った言葉を聞いて刺激を受けた生徒もいた。
- ・和気閑谷高校の生徒を知ってもらおう。また、地域の方の和気閑谷高校に対する意識改革をする上でもよい取組だと思われる。

<来年度に向けて>

- ・お世話になった事業所の方を招いての発表会の実施
- ・社会人講話の開催
- ・地域貢献活動の充実（今年度は3年間お世話になった和気駅のかなり大規模な大掃除の実施と和気駅構内に和気高校生のつぶやきの掲示板の設置）
- ・就業体験実習先の代表という意識を持たせ、振り返りを充実させる。
- ・オンライン交流の可能性を探る。（1対1）
- ・協力事業所へただ学校から「お願いします」という関係から「まちのみんなで育てよう」という町を挙げたサポート体制が必要ではないか。

(4) 高大接続部会

●目的・目標

「高大接続部会」は県内の大学との連携を図り、本校教育の質の向上への提言と、各教科・科目や「閑谷學」における探究学習のさらなる充実を目指す。今後本校が持続的な発展をしていく上で、閑谷學の高度化及び本校の目指す生徒の包括的育成を軸とし、本校にとって必要なカリキュラムや教科の評価指標について協議する。

●内容

メンバー（順不同、敬称略）

岡山大学教育学研究科准教授	宮本 浩治	和気閑谷高校校長	藤岡 隆幸
全学教育・学生支援機構 准教授	吉川 幸	教 頭	久常 宏栄
岡山商科大学経営学部商学科教授	三好 宏	事 務 長	神田 明夫
山陽学園大学地域マネジメント学部学部長	大橋 和正	企画主任（教諭）	安東 真美
中国学園大学 副学長	住野 好久	部会主担当（教諭）	岡本 安宜
		カリキュラム開発等専門家	江森 真矢子

スケジュール

日	行事	内容（主な議事）
7月～9月	第1回高大接続部会	問いの設定および探究プロセスの高度化を目指した指導の在り方 ※書面開催
11月5日	第2回高大接続部会	個別の生徒に対する今後のアプローチと2年次の探究プロセスについて（授業見学）
3月4日	第3回高大接続部会	3年間の高大接続部会の取組の総括 ※オンライン開催

第1回高大接続部会

3年次生3人の発表動画、教員所見を資料として①問いの設定②探究のプロセスについて協議を行った。

<意見の一部>

- ・ 「不登校」や「養護教諭と不登校」といった一般的テーマでなく、「不登校気味の弟」という具体的で個別的な対象に限定し、当事者としてこの問題に取り組むかという問いの設定が良い
- ・ 探究学習の問いのあり方については、一つ決める場合でも、細かいテーマからではなく、自分で関心のある大きなテーマから始めるのが良い。広く調べてみて、そこから

自分の興味のあるポイントに少しずつ絞っていくことが理想である。

- ・ 問いの段階として「考えて分かる問い」「調べて分かる問い」「調べて考えてやってみて分かる問い」という段階的な指導が良い。
- ・ 探究動機から調査テーマに至った経緯、ないしはその過程をもう少し丁寧に説明することが必要である。
- ・ 興味のあることから掘り下げるようになっているのは良い。その前提として「興味」をどのように見つけるのか。例えば「養護教諭になりたい」という気持ちを、生徒はいつ見つけるのか。閑谷學として、興味を広げたり、気づいたりする取り組みを強調する必要がある。
- ・ 先行研究の問い直しをより重視し、「真に価値のある課題の設定」を目指すべきだと思います。そうした観点から「探究学習の学びの軌跡」「ポートフォリオ」などの活用と振り返りが必要である。

第2回高大接続部会

2年次生の閑谷學の授業見学を行い、個別と全体の視点で協議を行った。

<意見の一部>

- ・ 問いを言語化できていない。情報収集・整理で止まっている多くの生徒への足場架けが必要である。
- ・ ブラック校則、肌荒れといったテーマがあったが、子どもたちの視野が狭く探究の課題になっていない。多面的に見させて、経験させて穴掘りの横幅を広げることが大切である。
- ・ アンケートについて、何を問う必要があって、どういう風に問うのかという設計が必要である。
- ・ 学科によって学びの質が異なるなら、クラスごとのカリキュラムにしたほうが良い。
- ・ 教員からのコミュニケーションの均一化を図る必要がある。
- ・ テーマを絞ってはどうか。世の中をよくするために「SDGs」に関連づける等、社会にどう貢献するかで具体化できる。
- ・ 課題解決のプロセスに慣れるための枠組みが必要に感じる。

●検証（取組による成果と課題）

問いの立て方とその質の向上について、いただいたご意見から、教員が指導に活かせる知見として校内での共有が図れた。また、探究課程の随所において、教員からの問いかけ、生徒同士の相互評価が重要であると再確認した。教員の指導の均一化を図るためにも、校内研修などに力を注ぐ必要がある。

(5) 学習成果発表会

●目的・目標

令和元年度から令和3年度まで文部科学省より指定を受けた「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の総括として、生徒による地域協働活動の発表や生徒と地域の方との対話をとおして、3年間の研究成果を報告する。

●内容

- 1 日 時 令和4年2月1日（火）13：15～15：45
- 2 会 場 体育館（代表生徒によるステージ発表等を YouTube 配信）
7教室（1年次生のグループ発表後、1・2年次生が YouTube 視聴）
- 3 内 容 【第1部】生徒発表 【第2部】高校生と地域の方との対話

時間	オンライン配信（体育館）				7教室
(13:10)	(配信開始)				着席完了
13:15～	開会				オンライン視聴
13:25～	準備		発表時間	質疑時間	準備
13:30～	生徒発表	【閑谷学・グループ探究】 1年 歴史・文化ゼミ 「大国家グループ」	5分	5分	1回目発表
13:40～	準備				(2年生教室移動)
13:45～	生徒発表	【閑谷学・グループ探究】 1年 ビジネスゼミ 「古民家カフェグループ」	5分	5分	2回目発表
13:55～	休憩				休憩
14:00～	生徒発表	【閑谷学・個人探究】 2年 保志岩 柚葉	5分	5分	オンライン視聴
14:10～	生徒発表	【閑谷学・個人探究】 3年 森岡 琴絵	10分	5分	
14:25～	生徒発表	【地域協働探究】 3年 井上 健太、山崎 明	10分	5分	
14:40～	生徒発表	【課外活動】 2年 佐野 幹汰、高山 真広	5分	5分	
14:50～	休憩				休憩
(15:00)					着席完了
15:05～	発表講評	岡山県教育庁高校教育課			オンライン視聴
15:10～	対話	「高校生と地域の方との対話」 3年 村田 大和、山崎 明、林 暁娘			
15:40～	閉会				
15:45	配信終了				HR教室へ移動

- 4 参加者 1・2年次生徒全員、3年次生代表者、教職員
<Zoomからの参加>
運営指導委員6名、岡山県教育庁高校教育課高校魅力化推進室2名、
対話に参加する地域の方2名
- ・和気町役場 まち経営課 課長代理 新田 章博 氏
 - ・有限会社ビッグモリーズ 社長 大森 雅勝 氏
- 5 配信 URL https://youtu.be/7-VzZAn_W0k
配信業者 株式会社服部管楽器



●検証（取組による成果と課題）

外部関係者（学校運営協議会委員、近隣中学校・事業所他）から30名ほどの参加申込みがあったが、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、オンラインで視聴していただいた。オンラインでは代表発表のみを配信した。同時進行で1年次閑谷学地域探究（グループ探究）の中間発表を全員が行い、2年次生が聞き手となった。1年次生にとっては他学年に発表を聞いてもらうのは初めての経験であり、2年次1学期まで行うグループ探究について他者から気づきを得るよい機会となった。今回は外部から参加していただけなかったことが残念である。オンラインの視聴回数は510回、アンケート回答数は9件（2月末現在）である。今後もアーカイブで視聴をしてもらう。

アンケート等での地域の方からの感想は以下のとおりである。

- ・2・3年次生の発表がとてもよかった。「地域と協働して」というのが伝わってきた。
- ・発表者のプレゼン能力が向上している。
- ・学年に応じた課題設定で、しっかり地域と連携が取れた好事例である。
- ・地域の人との対話が印象に残った。「人と接することが苦手だった」「探究学習が面倒くさいと思った」という生徒が変わったことが一番の成果ではないかと思う。今後もそういった生徒の変容という点を前に出してカリキュラムが運営されるとよりよいものになると感じた。
- ・オンラインでの参加は難しかったが、またこういう機会があれば参加したい。
- ・将来、どのような道に進んでも、高校で学んだ経験を生かし、地域に貢献できる人でいてください。東備地域も盛り上げてください。
- ・よい取組であると思うので応援したい。
- ・私は和気町民です。今回のような活動を地域の人、近隣の中学生に知ってもらえるようにすればいいのではと感じました。大変いいイベントだと思います。

(6) 高校生探究フォーラム

●目的・目標

岡山県教育委員会が主催し、県立高校の生徒が各校で取り組んでいる探究活動の成果を発表するとともに他校の取組を共有することで、高校生一人ひとりの夢を育む契機とする。

●内容

- 1 日 時 令和3年12月27日(月) 9:30~16:40
- 2 会 場 ピュアリティまきび(岡山市北区下石井二丁目6番41号)
- 3 発表形式 ステージ発表 発表10分・質疑応答5分
ポスター発表 発表5分・質疑応答5分
- 4 本校参加生徒 ステージ発表 「自然科学ゼミ/耕作放棄地グループ」
2年次生 2名、1年次生 3名
ポスター発表 「自然科学ゼミ/ビオトープグループ」
1年次生 4名

●検証(取組による成果と課題)

「閑谷学」での取組を発表した。ステージでは1・2年次生が合同で、2年次が1年次に引き継ぎをした活動について発表した。ポスターでは、旧閑谷学校から要請を受けた環境保全活動も踏まえて、先輩から引き継いだ校内のビオトープについて発表をした。

本校では生徒全員に多くの発表機会を与えることを推奨しており、中学校まで経験がほとんどなかった生徒が大勢の前で発表する機会を得ることで、その後の校内発表でも自信を持って発表することができていた。他校生徒との交流は、初めて会った人とでも積極的に自分の考えを伝えられるように、交流の機会を増やすことが必要である。

・参加校一覧

【ステージ発表】 太枠部分：オンライン配信

	時間帯	会場		
		千鳥(2F)	白鳥(2F)	橘(3F)
第一部	9:30~9:45	開会行事・諸連絡	開会行事・諸連絡	開会行事・諸連絡
	9:55~10:10	玉島高等学校	玉野高等学校	鴨方高等学校
	10:20~10:35	和気閑谷高等学校	倉敷育徳高等学校	岡山操山高等学校
	10:45~11:00	矢掛高等学校	岡山城東高等学校	邑久高等学校
	11:10~11:25	玉野光南高等学校	高梁高等学校	瀬戸高等学校
11:40~12:00	発表校間における意見交換(会場:孔雀)			
第二部	12:50~12:55	諸連絡	諸連絡	諸連絡
	13:00~13:15	倉敷天城高等学校	笠岡商業高等学校	高松農業高等学校
	13:25~13:40	複数校合同	秀山高等学校藤山校地	笠岡高等学校
	13:50~14:05	真庭高等学校	倉敷鷺羽高等学校	岡山一宮高等学校
	14:15~14:40	発表校間における意見交換(会場:孔雀)		
第三部	14:45~14:50	諸連絡	諸連絡	諸連絡
	14:55~15:10	津山工業高等学校	西大寺高等学校	岡山御津高等学校
	15:20~15:35	高梁城南高等学校	津山商業高等学校	倉敷古城池高等学校
	15:45~16:00	岡山工業高等学校	倉敷商業高等学校	津山東高等学校
	16:10~16:30	発表校間における意見交換(会場:孔雀)		
	16:30~16:40	閉会行事(会場:孔雀)		

【ポスターセッション】 (オンライン配信なし)

		会場	
		孔雀(2F)	
		開会行事・諸連絡	
第一部	9:30～9:40		
	9:50～10:00	1回目	岡山城東高等学校、瀬戸高等学校、玉野光南高等学校、高梁高等学校、邑久高等学校、矢掛高等学校
	10:05～10:15	2回目	岡山操山高等学校、倉敷青陵高等学校、玉島高等学校、玉野高等学校、鴨方高等学校、和気閑谷高等学校
	10:30～10:40	1回目	岡山操山高等学校、倉敷青陵高等学校、玉島高等学校、玉野高等学校、鴨方高等学校、和気閑谷高等学校
	10:45～10:55	2回目	岡山操山高等学校、倉敷青陵高等学校、玉島高等学校、玉野高等学校、鴨方高等学校、和気閑谷高等学校
	11:05～11:25	発表校間における意見交換	
第二部	12:50～12:55	諸連絡	
	13:00～13:10	1回目	岡山一宮高等学校、倉敷鷺羽高等学校、笠岡高等学校、真庭高等学校、新見高等学校A
	13:15～13:25	2回目	岡山一宮高等学校、倉敷鷺羽高等学校、笠岡高等学校、真庭高等学校、新見高等学校A
	13:40～13:50	1回目	高松農業高等学校、倉敷天城高等学校、笠岡商業高等学校、新見高等学校B
	13:55～14:05	2回目	高松農業高等学校、倉敷天城高等学校、笠岡商業高等学校、新見高等学校B
	14:15～14:40	発表校間における意見交換	

・探究フォーラムのチラシ

県立高校での学びが満載
高校生
探究フォーラム
2021

「高校の探究活動ってどのようなことをするの？」
「〇〇科ってどんな勉強をするの？」

といった、みなさんの疑問に答えます。
県立高校生30グループによる探究活動の発表を、
オンライン配信します。ぜひ視聴してください★

令和3年12月27日(月)
9:30～16:40

参加方法 オンライン視聴
(下記専用サイト)

内容 高校生による
探究活動の発表

視聴はこちらから
専用サイトURL
<https://www.okayama-tankyu2021.jp>

お問い合わせ
岡山県教育庁高校教育課
高校魅力化推進室
☎(086)226-7825

主催 岡山県教育委員会

フォーラム内容

オンライン配信

- ステージ発表(1グループにつき、10分間)
- 発表時間等 詳細については、専用サイトをご覧ください。

発表時間等(予定)	発表高校(グループ)
9:30～11:25	岡山操山、岡山城東、瀬戸、倉敷青陵、玉島、玉野、玉野光南、高梁、邑久、鴨方、和気閑谷、矢掛
12:50～14:05	岡山一宮、高松農業、倉敷天城、倉敷鷺羽、笠岡、笠岡商業、備前(岡山校地)、真庭、瀬教校合同チーム
14:45～16:00	西大寺、岡山工業、岡山御津、倉敷古賀地、倉敷商業、津山東、津山工業、津山商業、高梁城岡

●ステージ発表の他に、「ポスターセッション」と「発表校間における意見交換」を行います。(オンライン配信は行いません。)

●新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては、発表形式等の変更により配信時間等が変更される可能性があります。その際は、専用サイトに掲載します。

専用サイトでは、フォーラム終了後も当分の間、発表グループの活動内容などを掲載します。

県内の教育関連情報を発信中！
岡山県教育委員会 公式フェイスブック
<https://www.facebook.com/okayama.pref.kyoiku>

県立高校の取組を発信中！
岡山県教育庁高校教育課 公式フェイスブック
<https://www.facebook.com/pref.okayama.kyoikukoukou>

進路を考える中学生の強い味方！
おかやま県立高校情報ナビ
<https://www.okayama-kenritsukoukou.jp/>
おかやま県立高校情報ナビ 検索

・専用サイト URL <https://www.okayama-tankyu2021.jp>



1 新聞記事

2021年(令和3年)11月3日 水曜日 東備 30

和気閑谷高生 ゆるキャラ考案

イノシシ、フジを愛らしく

3体は、フジの薄紫色の「いのちゃん」。同科の19花が垂れる様子を髪型に取り入れた女の子の妖精「藤ちゃん」、フジの花弁をモチーフに描いた「三藤さん」。イノシシを柔らかな表情で表現した「わけイク」(和気町泉と連携)

電子版なら他の地域版も読める
山陽新聞デジタル
<https://www.sanyonews.jp>

ゆるキャラを考案した和気閑谷高の生徒たち

ゆるキャラをあしらったキーホルダー

6日発売

キーホルダー製作

ガチャガチャは、6日から特別史跡・旧閑谷学校(備前市閑谷)で始まる「イトアップ」に合わせ、会場に設置する。1回200円。売り切れ次第、終了する。

今後にはキャラを使ったリアファイルやマスキングテープの制作も検討中という。

デザイン担当の豊田純さん(17)は「小さなお友達でも親しめるように画した。たくさんの人に愛されてほしい」と言い、広報担当の小林咲夢さん(16)は「見た人が少しでも和気町に関心を持ち、遊びや観光に来るきっかけになれば」と話す。

新型コロナウイルスに負けず地域を元気づけようと、和気町の本荘小(衣笠)と和気閑谷高(尺所)の子どもたちが、地元・本荘地区の住民と一緒にイルミネーションを制作している。コロナの影響で自粛を余儀なくされた旅行や和文字焼きまつりをテーマに光で表現。20日からJR和気駅前で点灯するため準備を進めている。(片岡尚也)

2021年11月3日 山陽新聞

2021年(令和3年)11月12日 金曜日 東備 26

和気・本荘地区 児童生徒と住民制作

イルミで地域元気に

20日から駅前点灯

新型コロナウイルスに負けず地域を元気づけようと、和気町の本荘小(衣笠)と和気閑谷高(尺所)の子どもたちが、地元・本荘地区の住民と一緒にイルミネーションを制作している。コロナの影響で自粛を余儀なくされた旅行や和文字焼きまつりをテーマに光で表現。20日からJR和気駅前で点灯するため準備を進めている。(片岡尚也)

同駅前では恒例の「和」を浮かべる夏祭りのイルミネーションを手掛ける住民組織「本荘まつり」の情景を表現。和気閑谷高の生徒が協力し、和文字焼きまつりや旅行の情景を表現。和気閑谷高の生徒が協力し、和文字焼きまつりや旅行の情景を表現。和気閑谷高の生徒が協力し、和文字焼きまつりや旅行の情景を表現。

協賛メンバーとともに電飾パネルを制作する子どもたち

作品は10日の試験点灯までに駅前ロータリーに設置する。鳥のオブジェやクリスマスツリーなども登場し、全体では計2万5千個のLEDで彩る。来年1月10日まで点灯する。

本荘小5年新井宮様さん(10)は「一見して人が少いけど癒やされたらうれしい」と和気閑谷高2年小林咲夢さん(16)は「来年こそは『日常』が戻ること願った」と話した。協議会は「最高に華やかな空間になるはず。ぜひ足を運んでほしい」としている。

種類のアサインを考案した。本荘小の児童は、吉井川近くの観音山山頂。8日には児童や生徒、頂付近に巨大な火文字のイルミネーションも作られた。江戶・明治期に吉井川を往来した高瀬舟の立体

身近なユニオン、催しなどお知らせください

山陽新聞デジタル
<https://www.sanyonews.jp>

2021年11月12日 山陽新聞



工夫重ね輝く東備の夜



クリスマスシーズンを迎え、東備地域にもあちこちにイルミネーションが右見左見、庭園や駅前、商店街に色とりどりの光のアートが飾られ、一帯を幻想的なムードに包んでいる。(大野雅文、片岡尚也)

東備版

電子版なら他の地域版も読める
山陽新聞デジタル
<https://www.sanyonews.jp>

身近なニュース、
会合、催しなど、
お知らせください。

備前支局
TEL:0869-64-2263
FAX:0869-64-1910

2021年12月21日 山陽新聞

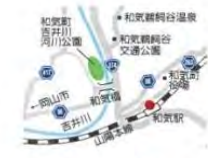
和気町 和気駅前イルミネーション

JR和気駅前広場
開催中～2022年1月10日(月)日没後～24:00



地元小学生によるデザインも登場。和気の冬を彩る看板イベント。

毎年恒例となっている和気の駅前を彩る冬のイベント。シンボルとなる高さ約7mのツリーをはじめ、今年は地元の和気閑谷高校のほかにも、本荘小学校5・6年生がデザインしたイルミネーションも登場。冬の夜を照らす、色鮮やかな光の空間を堪能してみよう。



◎JR和気駅前広場(和気郡和気町福富)
◎本荘地区助け合いのまちづくり協議会事務局
☎0869-93-1126

2021年12月号 月刊タウン情報おかやま

和気閑谷高 コロナの逆風に負けるな

寄せ書き「いのぼり制作」

逆風に向かって力強く泳ぐ姿に新型コロナウイルス収束への願いを込め、和気閑谷高(和気町尺所)の生徒が、このぼりをモチーフにした寄せ書きを作った。うろこの一枚一枚に全校生徒約300人が、住民や医療従事者向けに激励のメッセージをつづり、寄贈先の町役場に展示されている。(片岡尚也)



新型コロナウイルス収束を願って和気閑谷高の生徒が作ったいのぼり

コロナ禍で生徒と地域住民の交流機会が減っている状況を受け、このぼりを通してメッセージを届けようとする、3年生有志9人が企画した。このぼりは模造紙に水彩絵の具で彩色した2匹で、いずれも全長2・3メートル。「情熱」をイメージした赤色のコイは疫病に打ち勝ってほしいという願いを込めてひれに「拳」をあらわした。「希望」をテーマにした黄色のコイは片尾部分に、医療従事者に感謝を伝えるシンボルカラーの青色で

模造紙を描いている。メッセージは赤や緑、青といったうろこの形用紙に書き込み、おなか部分に貼り付けた。各生徒が一枚一枚に「コロナに負けるな」「つらい時こそ笑顔で乗り越えよう」となぞと言葉を寄せている。

住民や医療従事者向け うろこに激励メッセージ

このぼりは緊急事態宣言が県内へ発令された5月中旬から制作を開始し、約1カ月で完成させた。多くの住民に見てもらおうと8月下旬に町に寄贈した。現在は町役場の1階ロビーに飾られている。

リリーターの井上健太さん(3年)は「町民の皆さんと一緒にコロナ収束に向けて頑張っていきたい」と思いを込めた。小林咲夢さん(2年)は「毎日不安に生きている人を少しでも勇気づけたい」と話している。うろこに書き込んだ生徒一人一人のメッセージ。



このぼりには、全校生徒約300人が、住民や医療従事者向けに激励のメッセージをつづり、寄贈先の町役場に展示されている。

2021年7月21日 山陽新聞

廃線30周年を迎えた 片上鉄道



1923年1月1日に運行を開始し、片上駅から福原駅までの3.8kmを結び、片鉄の愛称で多くの人に親しまれていた片上鉄道が1991年6月30日で廃線となり今年で30周年を迎えました。片上鉄道は、吉井川の高瀬市の代わりに棚原山で産出される礫化鉄鉱を輸送する目的で建設されました。その後、通勤・通学など旅客営業も行われ、地域の交通手段の主力として活用されていきました。

廃線後は、平成15年に廃線跡を自転車道に整備し、「片鉄ロマン街道」としてサイクリング等に活用されています。今回は、就業体験で来ていた和気閨谷高等学校2年生の坂上莉菜さんと丸山裕里恵さんが実際に片上鉄道施設跡地を訪れ取材活動を行いました。



備前地区の備前塩田駅として利用されていた場所には、当時実際に使用されていた踏切、警報機や線路枕木が現在も残されています。



苦木駅として利用されていた場所には、現在もホームと駅舎が残されています。また、駅付近には片上鉄道の敷地と隣地の境を示す「境界標」と呼ばれるものが当時のまま埋められています。

岩戸地区の天瀬駅として利用されていた場所には、現在もホームと駅舎が残されており、昔は桜が満開になり絶好の撮影スポットとなっていました。

最後に、今回の広報活動を行った坂上莉菜さんと丸山裕里恵さんが、実際に現地へ行った感想を述べてくれました。

私は生まれてから和気町で育ちました。実際に歴史ある片上ロマン街道を改めてよく見たり、街並みを改めてみる方向の写真を撮りてみることにしました。史や跡地を知る人が少なく、またご存知の方も少ないと思います。春や秋には桜や清流が風に吹かれ、音響を聴くのはいいかなと思います。古い歴史といっしょに、中学校の頃まで通った片上鉄道沿線の道や、小学校の道などで行きたいなと思います。片上ロマン街道の跡が残っているのは、いいなと思います。

例えは、石に片上の「片」が育ちました。

実際に歴史ある片上ロマン街道を改めてよく見たり、街並みを改めてみる方向の写真を撮りてみることにしました。史や跡地を知る人が少なく、またご存知の方も少ないと思います。春や秋には桜や清流が風に吹かれ、音響を聴くのはいいかなと思います。古い歴史といっしょに、中学校の頃まで通った片上鉄道沿線の道や、小学校の道などで行きたいなと思います。片上ロマン街道の跡が残っているのは、いいなと思います。

例えは、石に片上の「片」が育ちました。

実際に歴史ある片上ロマン街道を改めてよく見たり、街並みを改めてみる方向の写真を撮りてみることにしました。史や跡地を知る人が少なく、またご存知の方も少ないと思います。春や秋には桜や清流が風に吹かれ、音響を聴くのはいいかなと思います。古い歴史といっしょに、中学校の頃まで通った片上鉄道沿線の道や、小学校の道などで行きたいなと思います。片上ロマン街道の跡が残っているのは、いいなと思います。

例えは、石に片上の「片」が育ちました。

2021年9月号 広報わか

電子版なら他の地域
山陽新聞
<https://www.s-y.co.jp/>

東備版 金庫室 ギャラリーに



ピックアップを取り付ける井方さん(左端)と和気閨谷高の生徒

和気町地域おこし協力隊員の井方克明さん(36)が、地元高校生らと連携し、銀行店舗跡の交流施設「エンターウェ」(福富)内の金庫室をギャラリーに改装している。芸術の表現の場として町民らに気軽に活用してもらいたい世代を超えた交流やにぎわいの創出につなげたい考え。来年2月中旬のオープンを予定している。(片岡尚也)

和気・交流施設で協力隊・井方さん

にぎわい創出へ 高校生らと改装 来年2月オープン

施設は2011年に閉鎖された中国銀行の支店跡で、鉄筋3階建て524平方メートル。現在は和気商工会が食堂やリーススペース、共用オフィスとして活用しているが、1階の金庫室(約13平方メートル)は荷物置き場として封鎖されていた。井方さんが活用を提案し、和気閨谷高の生徒有志らに声をかけて取り組むことにした。

金庫室内は、無数の傷がある壁を白いペンキで塗り直し、プロジェクト

クラーで映像作品を映せるようにする手狭な通路は置かず、写真などを飾るのに飾れるピックアップレールを壁に設置。造形物などは床や持ち込んだラックに展示してもらう。

改装は6月に着手。壁の塗り替えを終え、天井には作品を照射するLED発光ダイオードの照明を8カ所に設置するなど8割程度完成した。今月13日にはピックアップレールを取り付けるため、高校生4人が地元の電気業者のアドバイスを受けながら電動ドリルで壁に穴を開け、長さ約3メートルのレールをネジで固定した。

同高2年藤本優志さん(16)は「初めての経験で勉強になる。ウェブアートに興味があるので自分の作品も展示したい」と話した。

井方さんは来年2月にも学芸員らを招き、高校生向けに作品の見せ方や作り方を学ぶワークショップを開く予定。「芸術を身近に」がコンセプト。身近にこんな面白い人がいるという発見や出会いの空間にしたい」と張り切っている。

事業費は福武教育文化振興財団(岡山市)の助成金25万円を活用した。



銀行店舗跡のエンターウェ。1階に金庫室がある

2021年12月17日 山陽新聞

耕作放棄地、プラごみ… 地域課題の解決を目指す 和気閑谷高生 学習成果を発表



地域課題の解決を目指して学んだ内容を発表する和気閑谷高の生徒

地域課題の解決を目指す教育で文部科学省

の指定を受けている和気閑谷高(和気町尺所)は20日、学習の成果を披露する発表会を同高で開き、全校生徒約290人がこれまでの学びの内容を振り返った。

各教室に分かれ、グループや個人で発表し合った。耕作放棄地を取り上げた2年のグループは、同町内には作業効率が上がらない小さな農地が多く離農者が後を絶たないことが課題と指摘。荒れた農地の再生に向けた取り

2021年7月21日 山陽新聞

組みを紹介した。海洋テーマにした2年西村(16)は「地元が30年後の男子生徒は、30年後の海中のプラスチックごみが魚の総重量を超えるという予測値を基に、家庭ごみの適切な処理を呼び掛けた。同町の観光振興策を

テーマにした2年西村(16)は「地元が30年後の男子生徒は、30年後の海中のプラスチックごみが魚の総重量を超えるという予測値を基に、家庭ごみの適切な処理を呼び掛けた。同町の観光振興策を

に「地域との協働による高校教育改革推進事業」の指定を受け、21年度が最終年度。来年2月ごろに再度の発表会を予定する。県内では城東高(岡山市)も指定されている。(南原久人)



屋根の骨組みを見学する参加者

保存工事中の和気・旧大國家住宅 内部構造を特別公開

120人見学

保存工事が進む江戸大國家住宅(和気町時代の大地主邸宅「旧尺所、国重要文化財」)

で17、18日、工事の様子を特別公開され、町内外の約120人が普段は見られない建物の内部構造などを見学した。

修理の設計に当たる文化財建造物保存技術協会(東京)の職員らが、二つの茅葺き屋根を瓦屋根でつないだ「比翼入り母屋造り」の主屋と、蔵座敷の周囲に設置した高さ5メートルの作業用足場を案内した。現在は屋根の茅や瓦が取り外され、柱や梁が露出している状態で、柱の一本一本を取り換えるかどうかの見

極めをしていく作業が「難しい」などと説明した。和気閑谷高2年榎井美紅さん(16)は「建物の骨組みは普通見ることができないので興味深かった。どのように変わるのか楽しみ」と話していた。

2021年7月21日 山陽新聞

2 3年次卒業探究論文

「孤食と共食では食べているときの気持ちの変化はあるのか」

3年3組 岡崎 愛

1. 探究動機

世の中には、健康な人、不健康な人、長生きの人、短命の人、さまざま。同じ人間として生まれてきてこんな不公平なことはない。どうしてこんな大きな差ができるのか。

私が考える原因はこのテーマにもある「孤食」だ。「孤食」とは家族が不在の食卓で1人で食事をすることだ。これは好き嫌いを増やす要因になりやすい。好き嫌いを注意してくれる人がいないので、孤食が続くと好きなものが減り、栄養が偏り、栄養が偏りがちにもなる。それに加えてコミュニケーションが不足する結果、社会性や協調性のない人間になってしまふ恐れがある。そして生活習慣病につながってしまう。

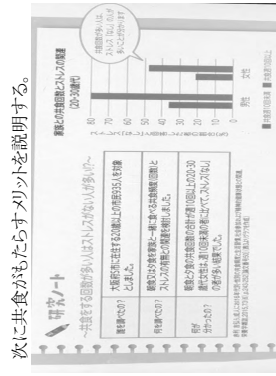
私はこの「孤食」が引き起こす食事の栄養バランスが偏ることを防ぎ、また共食を通じて食の楽しさを多くの人に知ってもらいたいという実現したい未来があるからこのテーマにした。

2. 探究手法

- ・インターネットで調べる。
 - ・和気関谷高等学校3年生にアンケートをとる。
- (アンケート項目)
- ①1週間のうち、どのくらいの頻度で1人で食事をするか。
 - ②1人で食事をするとき、TVやスマホを見ているか。
 - ③1人で食事をするとき、どんな気持ちか。
 - ④家族や友人と食事をするとき、どんな気持ちか。

3. 探究結果

(インターネットで調べたこと)
まず初めに孤食について説明する。「孤食」は他に5つの「こ食」を加速させる可能性が高い。それには「個食」「粉食」「濃食」「固食」「小食」がある。「個食」とは家族が揃っていないのに全員が自分の好きなものを食べることで「バラバラ食」とも言う。粉食とはパン、ピザ、パスタなど粉を使った主食を好んで食べることだ。「濃食」は加工食品など濃い味付けのものを食べることだ。これは、塩分や糖が多く、味覚そのものが鈍ってしまう。「固食」は自分の好きな食が硬いものしか食べないことだ。「小食」はいつも食欲がなく、少しの量しか食べないことだ。小食が続くと、発育に必要な栄養が足りなくなり、気力も続かず、無気力な子どもになってしまう。子どもの頃身についた食習慣を大人になっても改めるのは困難である。また、孤食であるときは、1人で食べていると喜びや幸せを感じることがないからおいしくない。間が持たないからテレビやスマートフォンを見ながら漠然と食べているという人が多い。加えて、1人で食べると悲しい。その理由として、なぜ自分は1人で食べているのかと苦痛で暗い気持ちになるからと書かれていた。



共食の回数が多い人や孤食が少ない人は、そうでない人に比べて心の健康状態が良いことや、ストレスがなかったり、自分が健康だと感じている人の割合

が高いことが分かった。また、朝の疲労感や体の不調がなく、健康に関する自己評価が高いことが分かった。

共食をすることは、生活リズム、規則正しい生活と深い関係がある。したがって、共食をすることで健康な生活が送れるようになるのだ。

(アンケート結果)

高校生の食習慣についてのアンケートの結果をあげる。

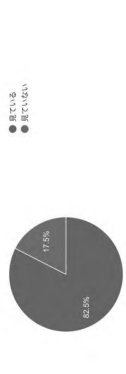
アンケート項目①の1週間のうち、どのくらいの頻度で1人で食事をするか、の回答



毎食、家族や友人と食べていると答えた人が35.4%
1-4回と答えた人が29.3%
5-9回と答えた人が13.4%
10-15回と答えた人が12.2%
16-21回と答えた人が9.8%だった。

このグラフから紫色と緑色の2割程度の人が、1週間の半分は1人で食事をしていることが分かる。

次に②の1人で食事をするときテレビやスマホを見ているか、の回答



82.5%の人が1人で食べている時、TVやスマホを見ていると答えた。17.5%の人が見ていないと答えた。この結果から、孤食であっても何もせずに食事をすることは少ないということが分かった。

そして③の1人で食事をするときどんな気持ちか、の回答

「なんとも思わない」と答えた人が一番多く、次に「寂しい」と答えた人が多かった。また、「1人で食べたくないけど、時間が合わないのだから仕方ない」と答えた人もいた。

反対に④の誰かと食事をするとき、どんな気持ちか。の回答

「会話ができるから楽しい」と答える人が圧倒的に多く、次に「1人で食べるときと比べておいしい」と答える人が多かった。

4. 結論

ライフスタイルの多様化に伴い、食生活も多様化していることが分かった。これにより、不規則な食習慣や栄養バランスの偏りなどの問題が生じる。解決する為には、共食がいかに重要かを多くの人に伝えていかなければいけない。また、家族一人ひとりのライフスタイルが変わってきている現代だからこそ、食を通じてコミュニケーションを大切にすることで食事の大切さ、楽しさ、マナー、食文化を子どもに教えられることができる。食卓は、子どもにとって社会のルールを学んでいく大切な場所なのだ。また、家族で同じものを食べることによって、栄養に偏りがなく、バランスの良い食生活を目標にすることができ

参考文献

- ・<https://www.mfa.co.jp>
- ・<https://www.mff.go.jp>

協力者

- ・令和3年度和気関谷高等学校3年生

「音楽による地域活性化」

3年2組 森岡 琴絵

1. 探究動機

音楽は、他の芸術とは異なり、目に見えないものである。音楽には、人の心を豊かにする力があつたり、人々の心を揺さぶらせたり、人々の心に安らぎをあたえたりする効果がある。その音楽の力で地域を活性化させたいと考えた。

近年日本では、地域格差が深刻な社会問題のひとつとなっている。特に、山間部などでは、過疎化や高齢化などにより、経済的に負のスパイラルを生んでいる。問題を解決するために多くの地方では、様々な事業を行っている。例えば、移住の推進政策やリターン政策などを行っている。現在、和気町では、移住の推進政策により、若い移住者が増えてきているが、元々住んでいる方々の高齢化が進んでいる。しかし、地方では働く場所が少ないことなどの理由から、移住者が増えないことも多い。このような厳しい状況にある過疎地域の再生と活性化には、どのような音楽関連のイベントが有効であるのかを知るために探究をすることにした。

2. 探究手法

私が考えた探究手法は2つある。1つ目は、現在の日本でどんな研究や探究が行われているかを知るために、音楽関連の論文や地域活性化関連の論文を読むことにした。2つ目は、和気町内でどんなイベントが開催されているのかを知るために、和気町内で開催された音楽関連の「イロマト」というイベントに参加した。

3. 探究結果

まず、地域活性化について調べた。地域活性化するには、一過性の観光客を増やすことより、移住者を増やすことが必要になってくる。今後はアングビジネスに移住し、都市部に通勤をしない形に

変えていけば、地域に残って働く人が増える。しかし、テレワークに移行するには様々な課題に直面する。この課題に、国の交付金を活用しNTT西日本ではテレワーク導入ビジネスの支援に乗り出している。このような取り組みにより、地方にテレワーク呼び込み、移住者が増えると、都市から来た人と住民の交流が広がり、地域の課題を移住者とともに考えていけば新たな企画やビジネスが開けることも期待される。

また、和気町で行われている取り組みには、「空き家問題はどうするか」といった問題に、「空き家バンク」を開発し、空き家を有効活用して移住者を増やす取り組みにつなげている。旅行代理店と協力して、移住希望者の下見や物件ツアーにも取り組んでいる。「買ひ物弱者をどうするか」といった問題には、近のアメリカーマーケットと協力して、吉井川の上空にドローンを飛ばし、山間地の集落へ食料品などを届ける検証実験を進めていた。和気町以外の地域では、「地域・高齢者の交通手段をどうするか」といった問題に、赤字によるバス路線廃止や運転手不足など弱体化した公共交通の代替手段として、北海道中頓別町では、Uber(ウーバー)の配車アプリを利用した住民の自家用車によるライドシェアリングの実証実験を行っていた。また、BOLDLY(ボールドリー)が自治体と協力して、自動運転バスの実証実験をしている。

このように、国の交付金を使った地方創生事業に名乗りをあげ、取り組んでいる自治体は多いが、多くの自治体で事業の継続に行き詰まっている。そうしたなか、滋賀銀行は、地域の課題の解決に貢献するため、2014年に地域経済活性化支援機構と滋賀銀行で連携を行い、「しがさん成長戦略ファン」を設立し、出資や支援を立ち上げ支援している。また、和気町では、移住者が増えることで、活性化していくの

次に、音楽イベントについて、イロマトという和気町公営塾企画の国籍や年齢を問わないイベントに

参加した。イベントは、Play with sound〜音で遊ぼう〜というタイトルで、ゲストの方と小学生から大学生、大人まで幅広い年代の方々と音で交流をするという内容だ。交流していく中で、ゲストの方の演奏を聞いたり、空き箱や空き缶などの廃材や身近にあるものを使って楽器を作ったりして楽しんだ。小学生が楽しそうに作る楽器と大人が作る楽器では、違う年代の人の視点から作らだされているため、それぞれの知識や経験が違うことにより、多種多様なものができていたけれど、その作った楽器で1つのお題に対してみんなで音を奏でている時には、心を合わせて奏でているようにも見えた。みんなが音を奏でることで、違う文化で育った人や違う年代の方々でも楽しく繋がっていくのではないかと感じた。

4. 結論

私は、音楽イベントを通して、地域活性化ができるのではないかと考えていた。

しかし、音楽イベントで地域を活性化していくには、移住者を増やすことから始め、移住してきた人と住民が交流し、アイデアを出し合い、ともに音楽イベントを作り、開催することで活性化するのはなにかと考える。その音楽イベントでは、地域の団体や学校も一緒に活動することで地域が一体化すると考えた。また、違う文化で育った人や違う年代の人が、音楽で人と人が結び付き、助け合いの輪を広げることが必要だと考える。イベントでは、主催している地域の方々だけでなく、その地域以外の方々にも訪れてもらい、その地域の方々の暖かさを感じてもらおう。また、地域の方と交流してもらおうことによって、その地域のいいところに気づいてもらうことで移住者が増やすことにもつながっていく。このように、移住者を増やしていくことで、活性化していくのではないかと考えている。イロマトで気づいた、それぞれの知識や経験が違って多種多様なものができていても、作った楽器で1つのお題に対して

みんなが音を奏でている時には、心を合わせて奏でているようにも見えたとことから、みんなが1つになれるような企画を考える必要があると考えている。また、イベント開催にはお金の課題に直面する。このような地域の課題解決には、ネットワークや資金力のある地方銀行や信用金庫と協力して、地域連携により、地域の資源と資金を結びつけ、地域経済の好循環を生み出すことが必要になる。この仕組みが実現すれば、地域が活性化していくと考える。

参考文献

- ・和気町移住情報サイト[WAKESUM] <https://www.town.wake.lg.jp/wakesum/>
- ・NEWS/公営塾 <https://www.town.wake.lg.jp/ente/wake/news/>
- ・なかとんべつライブドジェア <https://www.town.naka.tombetsu.hokkaido.jp/bunya/5299>
- ・自動運転に関する実証実験 <https://www.softbank.jp/drive/service/demonstration/>
- ・地方創生への挑戦 https://www.shigagin.com/pdf/investor_bank_019_38-39.pdf
- ・地域の「稼ぐ力」を引き出す〜持続可能な地方創生〜 https://www.shigagin.com/pdf/investor_bank_2016_18-25.pdf
- ・中小企業の経営の改善及び地域の活性化のための取組状況 https://www.shigagin.com/pdf/investor_midisc_2017mid_04-10.pdf

協力者

- ・和気町公営塾

「定着しやすい勉強法について」

3年3組 上田 美乃莉

1. 探検動機

私がこのテーマを探究しようと思ったきっかけは、幼い頃の記憶を高校生の今でも覚えているというところに気付き、それに対して、何度も思い出しているからではないか、という仮説を立て、これを勉強に応用できないかと考えたからだ。私の周りには勉強が苦手だと話す生徒は少なくない。勉強に対する苦手意識を持つ人は、勉強による成功体験が少なく、出来なかつたので勉強をしないという悪循環に陥っていると思われる。ここでは勉強による成功体験とは、勉強をした上での成績上昇を指す。勉強による成功体験が少ないから勉強が苦手であるならば、どうして勉強による成功体験が少ないのか。これについては、多くの人が勉強法を知らないからではないか、と仮定した。この仮定を元に、勉強による成功体験を増やすには勉強法を知れば良いのではないかと考え、多くの人が使いやしく定着しやすい勉強法について探究することとした。

2. 探究手法

今まで定着しやすさやできてきた勉強法と、何度も思い出すことで定着しやすくなるということに基づいた勉強法を実験から比較する。

実験は計3回で行う。被調査者は和気閑谷高校の二年生。

実験の内容は、二年生で定期的に行っているSPIテストを出題範囲とし、3日後、その出題範囲からテスト形式で解答してもらう。

1回目では、勉強法を指定せずテストを行う。そして、テストに向けてどんな勉強をしたかアンケートを取る。

2回目では、4つの勉強法を4つのグループに出席番号で分かれて勉強してもらい、テストを行う。勉強法の強制はしない。だから、指定した勉強法に取り組みたか、取り組んでいない場合はどんな勉強をしたか、アンケートを取る。

4つの勉強法の内容は、以下の通りである。

- A: 解答を見ながら、10回書く。
- B: Aを書くことに声に出して読み上げる。
- C: 解答を思い出し、正否を確認する。
- D: Cを書き出し、正否を確認する。

3回目では、2回目で成績が良かった勉強法で全員に勉強してもらい、テストを行う。そして、指定

した勉強法に取り組むためか、取り組んでいない場合はどんな勉強をしたか、アンケートを取る。

なお、SPIテストは10点満点の筆記型テストであり、全てのアンケートはGoogleのアンケート機能、フォームを使用する。

3. 探究結果

まず、1回目のテストでは実験で比較を行うために、勉強法を指定する前の点数を取る。このテストで得た点数から、次の勉強法を指定するテストで、どの程度点数が変化してきたかを求める。二年生95人中83人が回答してくれた。組ごとに、1～5点、6～10点と分けて表記する。

	1組	2組	3組	4組	5組
0-5点	18人	17人	5人	11人	10人
6-10点	2人	3人	14人	3人	4人

また、1回目のアンケートを行い、どのような勉強をしているのかを調べる。二年生95人中65人が回答してくれた。0内は実際の回答文を一部例として引用している。内訳は多かつた順に、勉強法としていない21人、見たものの朝に見た、ワークを読んだ、など14人、見たものの(ノート)に書いた、いっぱい書いた、など14人、特殊・他のもの(偉人)にあだ名をつけた、友人と問題を出し合った、声に出した、赤シートで隠した、など8人、明記されていなかったものの(暗記)した、頑張った、など5人、というアンケート結果だった。

勉強していない	見たもの	書いたもの	読んだもの	暗記されたもの
2人	14人	14人	8人	5人

次に、2回目のテストでは4つの勉強法を4つのグループに出席番号で分かれて勉強してもらい、テストを行った。出席番号順に、1～5番はA、6～10番はB、11～15番はC、16～20番はDと分かれてもらった。そして、テスト後のアンケートで、指定した勉強法に取り組んだと回答した人の点数の変化を、グループごとに、上がった人、下がった人、変化のなかった人と表記する。

	A	B	C	D
上がった	9人	4人	5人	6人
下がった	1人	0人	0人	0人
変化なし	3人	1人	1人	1人

この結果から、グループごとに、上昇した値の最高と最低、上昇値の平均を求める。

	A	B	C	D
最高値	+7	+3	+7	+7
最低値	+1	+1	+1	+1
上昇平均値	+3.6	+1.5	+3.4	+4.3

また、勉強法に取り組んでいないと回答した人は38人、アンケートに無回答だった人は26人であった。取り組んでいないと回答した人がどのような勉強法をしたかをアンケートを行った。0内は実際の回答文を一部例として引用している。多かつた順に、見たもののワークを見た、見て覚えた、など11人、勉強法を解いた、など7人、特殊・他のもの(友人)とワークを出し合った、声に出した、赤シートで隠した、など7人、明記していない(暗記)した、頑張った、など4人、というアンケート結果だった。

勉強していない	見たもの	書いたもの	読んだもの	暗記されたもの
9人	7人	11人	7人	4人

最後に、3回目のテストでは2回目で成績の良かったDの勉強法で勉強してもらい、テストを行った。そして、テスト後のアンケートで、指定した勉強法に取り組んだと回答した人の点数の変化を、1回目と2回目と比較し、上がった人、下がった人、変化のなかった人と表記する。

	1回目から	2回目から
上がった	17人	12人
下がった	0人	5人
変化なし	2人	4人

この結果から、1回目と2回目に分けて、上昇した値の最高値と最低値と平均値、下降した値の最高値と最低値と平均値を求める。

(上昇値)	1回目から	2回目から
最高値	+7	+6
最低値	+2	+1
上昇平均値	+4	+3

また、1回目からは下降したものはなかった。

(下降値)	1回目から	2回目から
最高値	—	-1
最低値	—	-5
下降平均値	—	-3

また、勉強法に取り組んでいないと回答した人は18人、アンケートに無回答だった人は56人であった。取り組んでいないと回答した人がどのような勉強法をしたかをアンケートを行った。0内は実際の回答文を一部例として引用している。多かつた順に、明記していない(未記入)、いろいろ、など7人、見たものの(当日)に見返した、解いて正解を見た、など5人、書いたもの(答えを一度見ながら覚える、綴りを何回か書く、など)4人、勉強法はしていない1人、特殊・他のもの(調べた、など)1人、というアンケート結果だった。

勉強していない	見たもの	書いたもの	読んだもの	暗記されたもの
1人	5人	4人	1人	7人

4. 結論

私は、CとD、特にDが定着しやすさと予想していた。Cは書く、読むことをしなくてよいので手軽であり、Dも書くことが必要だが、数回で済む。そしてこの2つは、何度も思い出すことに重きを置いた勉強法だったからだ。だが、一部予想に反して、Aが高く、Bが低かった。私がAを低いと予想していたのは、多く書くことで達成感はあるものの、それゆえに手軽ではなく、また、書いている間、覚えることより書くことに意識が向き、書くという作業になってしまいがちだったからだ。この予想から、Aが高かつた要因としては、勉強法を実施してくれた人数が少なかったこと、アンケートに解答する人が少なかったこと、勉強法を伝えてから勉強の期間が3日間と短かつたこと、SPIテストは点数を競うようになっていたため自分の勉強法から変えられなかつたことなどが考えられる。次に実施する際は、点数を競わないかつ成績に開かないテストをこちらが用意すること、勉強の期間を3日より多く取ることが注意すべきだろう。また、今回のアンケートはGoogleのアンケート機能、フォームを使用した方が、その場で回答が集められることや、時間が経って回答を忘れることがないことなどから、紙媒体でのアンケートを行うようにすべきだろう。

今回の探究の結果だけでは、Aが必ず定着しやすしいとは言えない。次に探究を行う際は、今回の問題点を改善して取り組みたい。

協力者

- ・和気閑谷高校の二年生団の先生方
- ・和気閑谷高校の生徒の二年生のみなさん

「服装が人に与える印象」

3年1組 籠安 亮太

1. 探究動機

テーマ設定の動機、自分がいつもと違う系統の服装をした時、満員電車に乗り自分が4人席に座った時誰もその4人席に座ってこなかった事がある。自分はその時あまり他人から好感を得られる様な服装をしていなかった事、それが仮説として挙げられる。これは服装に何か要因があるのではなにかと考える。そこでなぜ人は服装で人を判断するのかを疑問に感じた。どのような服装の組合せで相手にどの様な印象を与える事ができるのか、服装で感じられる清潔感、格好いい、かわい、怖い、などの感情は人によって個人差はあるのかなどについて探求してみれば何か面白い理由や新たな発見が得られると思った。そして今後の将来の職業などに繋げていけるのではないかと思いこの探求を試みる事にした。

2. 探究手法

まず服装での印象についての疑問は、まずファッションに関心がある人とそれほど関心が無い人がどれくらい差があるのか。またその人達の間では好印象をもつ服装にどの様な差があるのか。なぜ人間は服装や第一印象でこの人は優しそう、怖そうなどと思うたり、その人に好印象を受けたりするのか。多数の人たちから好印象を受けやすい服装の共通点とは何があるのか。男女で好感を持ちやすいファッションの系統に差はあるのか。また大衆の人たちに好印象を持ってもらえるファッションとはどのようなポイントがあるのか。好印象と服装の流行(トレンド)との関連性はあるのか。好印象と服装の流行(トレンド)を全校アンケート、インターネットでの調査で研究する。

3. 探究結果

今回全校生徒(127人)に向けてアンケートを行なった。

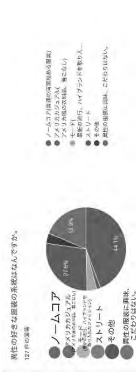
- ・あなたはファッションに興味がありますか？
- ・異性の好きな服装の系統は何ですか？

・あなたは道に迷っています。どちらの女性に道を尋ねますか？

この三つの質問を全校生徒に回答してもらった。

あなたはファッションに興味を持っていますか？という質問では約7.5割の人が興味があると回答した。この事からかなり多くの人がファッションに気を使っていることが分かった。

異性の好きな服装の系統(今回はノームコア、アメリカカジュアル、モード、ストリート、その他の系統、と5つの系統に分けて質問を行った)はノームコアというシンプル目で清潔感のある服装(今回は清潔感を柄の入っていない、無地の服、ビジネス寄りのアイテムとする。)が4.5割とほぼ半分がノームコアの服装に好印象を持っていると言える。だが現在の流行である個性の強いストリートから7割という結果になった。これは流行によって好印象を持つ系統が左右されている結果となり好印象と流行は少し関係があると言える結果が得られた。少数だが派手な服装であるモード、アメリカカジュアルを好む人がいる事も分かった。



ノームコアのイメージ(左)

アメリカカジュアルのイメージ(右)

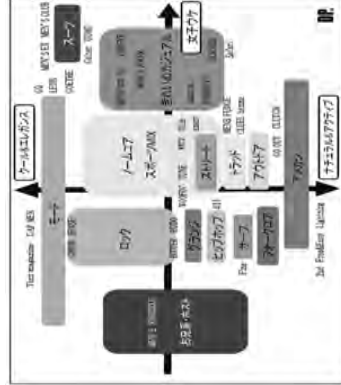


モードのイメージ(左) ストリートのイメージ(右)



あなたが道に迷っているときおしやれで派手を意識した人と普通の格好をした人どちらに声をかけますかという質問(好感の得やすさ、話し掛けやすさの差がどれほどあるかを調査するため)では8割の人が普通の格好と答えた。理由を聞いてみると格好が派手な人はブランドが高そう、普通の格好の方が話し掛けやすいなどの意見が多くあり、やはり先程の質問と同じようにシンプルに格好をしていた方が好印象を得られやすい事が分かった。

また、あなたが道に迷っているときおしやれで派手を意識した人と普通の格好をした人どちらに声をかけますかという質問(好感の得やすさ、話し掛けやすさの差がどれほどあるかを調査するため)では8割の人が普通の格好と答えた。理由を聞いてみると格好が派手な人はブランドが高そう、普通の格好の方が話し掛けやすいなどの意見が多くあり、やはり先程の質問と同じようにシンプルに格好をしていた方が好印象を得られやすい事が分かった。



4. 結論

今回の研究より変化し化した自分の視点・考え方はファッションに興味のある10代は多く、見た目、話し掛けやすさの点からも男女問わずノームコア(シンプル目)な格好を好む人が多く、また多くの人たちに好印象を持ってもらう為の服装のポイントにはノームコアの特徴である清潔感がかなり重要である事も分かった。無地のシャツやパンツなどはビジネスシーンでの着用品が多いためこれこれらを服装に取り入れると、この人はしつかりしている人という印象にも見える事が原因として考えられる。そして好印象＝流行の関連性がある事も発見できた。このことから他人からの好印象を得たいのであれば常に流行を知ることが分かる。他人からおしやれ、かつこいい、かわい、服装だなど思われるためには様々な要因(今回はシンプル目を服装であること、清潔感の感じられるアイテムを取り入れていること、流行を取り入れている、おしやれを意識しすぎた派手なファッションをしない)が掛け合わさる事によって好印象を相手から得ることが出来る事が分かった。だがシンプルに服装に好印象を持つ人が多いのは明らかになったが、反対にシンプルに服装に少数だが好印象を持たない人がいる事も明らかになった。これは自分の着用している服装の系統を着ている相手に好印象をもっている傾向があるのではないかと考える。例えば人は自分の好きな服を着るので出会った相手が自分の好きな服を着ていたら良いイメージを持つのではないかと推理して挙げられる。この事から相手の服装に合わせた服装を身に着けることが好印象を得られる事に繋がる事も分かった。

参考文献

<https://mensdrip.com/fashion/mensfashion-kind>

(左) 男性ファッションの名称と傾向 分布

「オンリーアンのグラブ職人になるには」

3年2組 藤原 鉄朗

1. 探究動機

まず初めに、今回のテーマに関わる話をする。
私が所属している野球部では、身体障がい者野球チームの岡山桃太郎と交流がある。交流の始まりは3年前の西日本豪雨の際に練習場所がなくなっていた岡山桃太郎に練習場所の提供として2019年の秋に交流試合をしたことだった。私たちは交流をする際、沢山の活動をした。中でも一番の大きな活動はオリジナルのグラブ製作だ。私は自分の体に合わないグラブを使い、ストレンスを抱えている選手がいることを知った。そこで野球部のチームのみんなな意見を出し合い、岡山市の株式会社タカギスポーツと協力し、世界に一つだけのオリジナルのグラブを作った。
その他の活動は、クラフトファンディングを行い、グラブ製作にかかる費用や活動に必要な資金の援助を受けた。また、グラブを作るときにできる廃棄される端切れを使い、プレスレットをつくってクラフトファンディングの返礼品を作った。廃棄される端切れを再利用することで、SDGsの「ゴミを減らす活動、つくる責任」にも当てはるため、SDGsについても考える機会になった。

私は中学一年生のころ自分のグラブを直した際に最初は上手いかわかったけど、インターネットで調べうまく直せるようになり、楽しくて色々調べて

いくと気づけばグラブが好きになっていった。そこで、将来は誰にでも使ってもらえる万能型のグラブ職人になりたいと思っていた。しかし、岡山桃太郎さんとの交流を通して、世界に一つのオリジナルグラブの製作に携わる中で、自分が作る道具で身体障がい者野球の支援をし、障がい者の方一人ひとりにあうグラブを提供できるグラブ職人になりたいと思い探究をした。

2. 探究手法

グラブを作るにはグラブ職人にならないといけないので、グラブ職人になる方法を知るため、またオリジナルグラブの製作について、将来自分が製作する際の参考にするため、職人の工夫やアイデア、どんなことに苦労したかなど事細かに教えていただくためタカギスポーツにインターシップに行くことだ。

3. 探究結果

グラブ職人になるには、職人の元で修行する必要があるが、一人で完璧なグラブを作るまで2年以上はかかるそうだ。また、なぜこれは売れるんだろう、なぜこのグラブが人気なのだろう、この製品を作る工程はどのような感じなのだろうなど、日頃からグラブに関心をもつことが大切だとおっしゃっていた。また、グラブに関する知識はないとダメだとのことなので、軟式と硬式グラブの違い、革についてな

りど基礎的なことを中心に、グラブ作りの応用までさまざまなことを学んだ。オリジナルグラブについては、お客さんの要望を細かに聞き、プレーしている姿をみることも大切であり、さらに、今までの常識にとらわれず、どんなことにも挑戦して試行誤りをしていくことが重要であるとおっしゃっていた。

今回の活動では、エースの早嶋選手と最年少の箕輪(みのわ)選手の2人のグラブを製作した。私は早嶋選手の時は案を出しましたが現在使っているものと大差がなかったため、採用されなかった。しかし、箕輪選手の時は自分の意見が採用され、実際にグラブ製作に携わることができた。

エースの早嶋選手は生まれつき左手首から先がなく、投球時はグラブのウェブに左手首を通していた。しかしグラブが落ちないように意識して投げるとフォームが崩れ、右肘を痛めてしまった。早嶋選手は世界大会に出場し、MVPに選ばれたほどの選手。今後さらなる活躍のため、身体障がい者野球の発展のために今回製作することにした。製作したグラブは手口を大きくし、中の指袋を調整。また

た背面に左腕を入れるポケットを作り、挿入しても落ちない設計にした。刺繍には唯一夢二という言葉を入れ、世界に一つだけのグラブ製作、そして夢への挑戦という二つの思いを込めたグラブになった。そしてもう一人の箕輪選手は生まれつき握力が弱く、市販のグラブでは重く大きいため、グラブが落ちたりボールが取れなかったりと問題があっ

た。箕輪選手は最年少であり今後の活躍への期待、身体障がい者野球の発展のために今回製作することにした。製作したグラブは皮を軟式グラブよりさらに薄くし、捕球面の皮の形、枚数を調整し、閉じやすい設計に。また、ウェブに返しを作ることのできる逆シングルの打球も落とすことなく取ることで、グローブそのものを落とさないようにした。私は手口にバンドをつけるという意見を出した。

4. 結論

グラブ職人になるには常にグラブのことを考え、常に学ぶ姿勢で修行に当たるため、相応な努力と忍耐力が必要であるということが分かった。またグラブに関する知識も必要であると学んだので、勉強していきたい。

オリジナルのグラブを作るにあたって、大切なのは常識にとらわれないことと試行錯誤を繰り返すことだということが分かったので、日頃からいろいろなことに関心をもって生活していきたい。

協力者

- ・岡山桃太郎 早嶋選手 箕輪選手
- ・(株)タカギスポーツ 森川氏

「ロボットを活用して最適なリハビリをするには」

3年3組 中本 美涼

1. 探研究機

私は将来、理学療法士を目指している。理学療法士の事を調べてみると「ロボットがリハビリをする時代が来る」という記事を見た。その記事には、今後ロボットが導入され、徐々に機械化が進むとロボットが理学療法士の仕事をすることも近いというものだった。今は理学療法士が時間をかけてコミュニケーションをとって患者さんに合ったプログラムを計画しているのに対して、ロボットは表情や会話の中から心の状態を推測し、ケアをするのは難しいと考える。しかし、ロボットを上手に活用すると今よりもいい治療を患者さんに行うことができ、効率が良くなると思うので、ロボットの理学療法への活用について気になり調べることにした。

2. 探研究手法

まず、現在、理学療法に活用するロボットについてどんなものがあるかをネット等で調べる。つぎに、理学療法の現場で、ロボットが担当部分と人間が担当部分について何が出来るかを調べ、さらに、どんなロボットがあればリハビリの質を上げ、仕事を効率よく行うことができるかを理学療法士にインタビューする。そして、ロボットを活用した理学療法への未来と、理学療法士の在り方について解明していく。

3. 探研究結果



- 画像① <https://news.pnasonic.com/jp/press/data/2014/09/jn140924-5/jn140924-5.html>
- 画像② <https://www.niken.jp/press/2009/20090827/>
- 画像③ <https://global.toyota.jp/newsroom/corporate/3/0609537.html>

私が実現したい医学療法の未来像は、理学療法士や医師、義肢装具士、工学者などと共に現場で働き、「患者さんに寄り添うロボット」を活用できるところにある。

今あるリハビリロボットは、「練習支援ロボット」「自立支援ロボット」「介護支援ロボット」などがある。どういったものが紹介する。

練習支援ロボットは、患者さんの練習を助けることができる。画像①「ウェルウォーク」というロボットが開発され、効率的な歩行練習を提供する事が可能になった。歩行が改善する期間の短縮、歩行が改善する効率の向上などの報告がされている。

自立支援ロボットは、患者さんの自立した生活を助けることができる。画像②「自立支援型アシスタントロボット」が開発され、患者さんの状態を検知し、足りない力をモーターアシストしてくれる。また、「みまもりシステム」により、ベッドの上の呼吸数、体の検知による夜間の異常の早期発見を支援することもできる。

介護支援ロボットは、介護する人を助けることができる。画像③「ロボット フォー インタラクティブ ボディアシスタンス」というロボットが開発され、人間のタイプの両腕により、一連の移乗作業を行うことができ、リハビリの負担を軽減させてくれる。腕を広範囲に覆う高精度触覚センサーを利用したロボット動作機能、情報処理の高速化により、ロボット全体を統制した動作が可能で分散情報処理などの特徴を持つ。

これからは、ロボットが担当部分と人間が担当部分に分かれてくる。ロボットが担当部分は、「筋電図からの疾患を分析」「姿勢を分析」「使えてない筋肉の特定」「歩行分析」「治療方針」などである。

それに対して、人間が担当部分は、「患者さんの心へのアプローチ」「患者さん一人一人の環境を考慮し、適切なリハビリ」「リハビリプログラムの最終判断」などである。

これらを踏まえて、私が今後実現すればいいと思うロボットは、「強制歩行ロボット」である。このロボットは歩くのにバランスが取れない方などに強制的に転げないように前に歩かせるようにするものだ。そうする事で、少しずつ慣れていき、バランスよく歩けるようになると思う。

訪問リハビリテーションで働いている理学療法士にインタビューしたところ、今後ほしいロボットは、「訪問リハビリの際に手帳を持ち運び可能なロボット」ということだ。訪問リハビリテーションとは、主治医が必要と認めた場合に、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士が利用者の自宅を訪問し、心身の機能の維持・回復、日常生活の自立を支援するために、理学療法、作業療法等のリハビリテーション

を行うサービスのことだ。また、介護する家族へのアドバイス・相談も行っている。このロボットが実現すれば、理学療法士の肉体労働の削減が可能となり、負担を軽減することができる。

4. 結論

近年、世界的に再生医療が注目されているが、脳卒中の再生医療の治療後にロボットを利用したりハビリエーションを行うことで相乗効果が期待されている。また、誰でも必要な医療行為を受けるために支払われる費用は診療報酬と呼ばれ、今まではロボットを使用した反復練習を行うことは認められていなかった。しかし、2020年の診療報酬改定ではロボットを使用することで機能回復が認められ、ロボットリハビリが推進される項目が追加された。一般用の介護ロボットもテレビCMで流れるようになり、今後、様々なロボットが普及し、ロボットを利用したリハビリテーションも広がっていくと考える。

脳や体の機能の研究が進み、ロボットとの相乗効果が期待され、各分野での研究や開発が進んでいる。ロボットリハビリテーションでは、ロボットを利用し正しい動作が反復して行えることがメリットであり、脳卒中や骨折後、内科的疾患で体力が落ちた方など様々な方に対し効果が認められている。

しかし、あくまでもロボットは利用するものであり、利用するためにリハビリテーションの技術や知識が重要となる。しっかりと基礎を学びつつ、最先端に対応できるセラピストを目指していきたい。

協力者 理学療法士 守谷さん

「地域協働探究で学んだことと考えたこと」

3年4組 山崎 明

1. 探究動機

私がこの探究テーマにした理由は、3年間の高校生活を終えるうえで自分が和気開谷高等学校のキャリア探求科に入学して何が得られたのか、ふと考えてみたからだ。そして答えを出すには時間が必要だと思い、閑谷学の時間を使って探究しようと考えた。更にこの探究を完成させることで、これからの人生でも生かしたいとも考えた。そして自分は2年生から地域協働探究に参加し、様々な事業所を訪問し、様々な仕事を体験した。中学生の頃に行った職場見学とは違い、高校生の今だから気づけたことも多かった。私が高校生活で特に力を入れて取り組んだ地域協働探究は、テーマとして最適だった。また、1つの事業所での活動が終わった後に行う振り返りの時間では、違う事業所に行った人たちの活動報告も聞くことができ、私の体験と比較できたのも良かった。

2. 探究手法

地域協働探究には3年生から選択授業で参加した。学校付近の事業所から少くも3つくらいを、私は3回の職場体験で今まで自分が行った職場体験の活動報告を見直してまとめ、

そこから何を学んだか考えてみた。私が地域協働探究を選んだのは1年生のとき、地域協働探究をとった先輩方の発表を聞いて、新しい事に挑戦してみたかったのと自分の進路が就職だったので高校生活の中で働くことを体験したかったからだ。そこで先輩方の話を聞き、私も地域にあるお店で体験学習をし、学校外での学習に取り組んだ。そして取り組んだ内容、学んだことや発見、次に生かしたいことなどをノートに書き、地域協働探究の授業で他の事業所に行った人同士で集まり、結果を報告しあった。そして、全ての就業体験が終わった後、スライドを作りプレゼンをした。これは中間発表の時に発表した私が私から考えたテーマを変えこの探究に定まった。

3. 探究結果



私は昨年と今年の計3回(緊急事態宣言時の校内就業体験の図書館は除く)で多くのことを学んだ。大きく3つに分ける。1つ目はコミュニケーションの大切さだ。私は3つの事業所のうち2冊所で接客の仕事に携わせてもらった。私は元々人見

知りで人とコミュニケーションを取るのが苦手だった。地域協働探究の授業をとったのは、この性格を直したかったものもある。そして、接客の仕事は必ずお客様と関わるので私の苦手意識も減っていた。また、お店の印象は店内の雰囲気だけでなく店員の愛想なども含まれているのだから知った。店員の接客が店の雰囲気につながる。接客の仕事の中でも重要なことだと分かった。2つ目は報・連・相の重要さだ。私は備前化成研で工場の見学時に、工場の仕事を潤滑に回すにはどうしたらいいのか福をきいた。備前化成研究所では外国から来た方も多く働いている。若い方が技術を学びにくるため数年で新しい方に入れ替わるそう。また工場には通訳の人はおらず私は始めのように仕事を滞りなくまわしているのか疑問だった。見学をしていると社員の方が1つの作業を行った後必ず2人で確認したり紙にチェックしたり、なにか起きればすぐに上司に報告をするといったことをどの従業員の方もしており驚いた。また、朝の朝礼で1人ずつその日のする仕事内容を口頭で説明することで作業を明確にするのと、各々の仕事に対する責任を持たせるといふ意図があることにも驚いた。3つ目は自分の意見を相手に伝えられるようにすること。作業中に話しかける際に私はよく分からないことを聞きに行った。そうすると小さなミスも大きくなる前に防げるということも学んだ。

4. 結論

私が地域協働探究で得たことは、働く上で人と関わるのは必要不可欠なこと。自分だけでは仕事を達成できないし、コミュニケーションをすることで仕事を円滑に進めることができる。自分が思わぬところで人とのコミュニケーションが成果を結ぶこともある。私は日本の「チームで働く」という考え方はとてもいいと思う。そして、この発見をしたことで海外の働き方にも興味が出てきた。特に海外の先進国、ドイツなどは個人の仕事以外では手伝わない、という考え方があった。一見、冷たいと思うが仕事を効率よく行い、残業などをしない働き方がある意味日本と真逆だ。地域協働探究に参加しなければ、このような疑問を持つこともなかっただろう。地域協働探究は、こうした学校生活では気づけない、意識しないことにも気づけ、実際に働いてみることで肌で感じられることが数多くある。社会に出る前に色々な事業所の方と会えたことは自分にとってすごく大きなことだ。結論として私は、和気開谷高校で地域協働探究を選んだことは、自分にとって大きな成長を与えてくれる、貴重な経験だった。

「働く為に必要なこと」

1. 探究動機	3年5組 濱田 蓮都	3. 探究結果	4. 結論
私がこの探究テーマにした理由は、進路が就職という事からどんな力が働く為に必要なのか気になり調べてみようと思ったからだ。また、三年生での選択授業で、「地域協働探究」という授業を選んだこともきっかけになった。この授業は、主に就職を目指す人が選択し、地域の企業や事業所に就業体験にいく事ができる。自分で働くという事を体験することで、どんな人がその企業では求められているのか、どんな仕事自分が向いているのかを考えて、知ることが出来ることを活かし、この「働く為に必要なこと」という探究テーマにした。	私は今回の探究を通して、働くためにはまず大きく分けて「コミュニケーション力」や「忍耐力」、「自己管理能力」の3つが必要になると考えた。まず、「コミュニケーション力」については、働くという事は基本的に一人でしていく事は出来ない。一人で作業をする工程別の仕事であっても前後の工程の人と関わっていく必要があるだろう。また、上司の方や取引先の方、数年働いていると後輩が出来るし、必ず人と関わる機会があるはずだ。その時に挨拶がしつかり出来ないといけない印象が悪くなったり、分からないことなどをしつかり聞くことが出来なくなったりし、うまく話しが噛み合わず仕事のミスにつながっていったりするのではないかと感じた。しかし、コミュニケーションを取ることがあまり得意でない人も多くいるだろう。私も初めは緊張して、職場体験の際に企業の方と話しをする事がなかなか出来なかったが、まずは「自分から挨拶をする」という事をしつかり心がけて、そこから始めていきたいと考えた。次に「忍耐力」については、就職するときに全ての人が自分が心の底からしたいと思える会社や職種に就くとは限らない。中には志望先に落ちるの次に選んだ企業に就職する人や、なんらかの事情で自分がしたいと思っていた仕事に就けない人も居るだろう。	そんな時にどのようにしてモチベーションを保ち仕事を続けていけるか、何を楽しみに働いていくのか、それを見つけていく事も大切だ。また、自分のしたい仕事や行きたい企業にいた人でも、続けていく中で飽きてきたり、嫌になってしまふ事もあるはずだ。それでも働き続けていく為の忍耐力を身につけていく事が必要だと考える。なのでまずは、自分のしたいと思えることを見つけ、その仕事につけるよう努力していくことが必要だと強く感じている。最後に必要だと思う力は「自己管理能力」だ。私はこの力が一番必要だと考えた。仕事は学校と違い遅刻や休んだりを簡単にすることは絶対出来ない。仮にしたいとしても周りに大きな迷惑をかけ、信用・信頼を失っていくはずだ。また、高校を卒業して一人暮らしをしていく人も多いだろう。一人暮らしをすると、今まで親に起こしてもらっていた人は自分の力で起きなければいけなくなり、自炊をするなど自分自身で健康管理をしていく必要がある。働きたすと今までの学生生活に比べて休みも減り、疲労がどんどん溜まっていくと思う。疲労だけでなくストレスも溜まったりと自分の体をしっかりと理解して毎日元気に会社に行き働いていけるように「自己管理能力」をしつかりつけていく事が一番大切だと私は考える。	以上のことから私は今回の探究を通して、「コミュニケーション力」・「忍耐力」・「自己管理能力」の3つの力が働く為に必要なことだと強く感じた。そして、地域協働探究での職場体験学習では、ただ本を読んだりインターネットで調べただけでは気づくことが出来ないようなことも、自ら体験することで気づくことが出来る。自分の将来に活かしていくことでできるとも良い授業だと感じた。上記であげた3つの能力以外にもまだまだ必要な能力はあると思うが、今回は私が体験したことから特に必要だと感じたものを三つをまとめた。そして、今の私は「忍耐力」と「自己管理能力」の二つはある程度持っていると思うので、私は「コミュニケーション力」を身につけていくために、まずは自分から挨拶をしていくということを中心にかけて高校を卒業するまでの残りの時間を過ごしていききたい。働くということは自分一人ですることには出来ず、遅刻など自分勝手な行動は一緒に働く同僚などに迷惑をかけるだけでなく、自分の信用を失うことにつながる。社会人としての自覚を十分に持ちマナーを守って働いていくことが大切だと思う。自分の全ての行動が働いていくなかで、多くの人に影響を与えるということを忘れなようにしたい。

3 運営指導委員会 会議録

<運営指導委員>

氏名	所属・職
石原 達也	岡山 NPO センター 代表理事
岡山 一郎	山陽新聞社編集局 編集委員室長
神崎 浩二	岡山県経済団体連絡協議会 事務局長
草野 浩一	岡山県総合政策局 地方創生推進室長
徳岡 卓也	ベネッセコーポレーション 学校カンパニー 西日本教育支援推進部 中四国支社長
前田 芳男	東海大学経営学部観光ビジネス学科 教授

【第1回運営指導委員会】

(1) 日時

令和3年9月28日(火) 15:00~17:00

(2) 開催形式

Zoomによるビデオ会議

(3) 出席者

・運営指導委員

岡山一郎、神崎浩二、徳岡卓也、中山尚美、前田芳男

・和気閑谷高校(指定校)

藤岡隆幸、久常宏栄、神田明夫、安東真美、赤嶋真一、江森真矢子、梅村竜矢

・岡山県教育庁高校教育課高校魅力化推進室(管理機関)

室貴由輝、神田慶太

(4) 内容

・運営指導委員による学校設定教科・科目「地域協働探究」の授業見学

・事業説明(本事業における取組の状況)、質疑応答・指導助言

(5) 質疑応答・指導助言(○運営指導委員、●和気閑谷高校)

○ 自然保護センターに中高生を呼ぶ計画があったが、具体的に進んでいるか。

● コロナ禍でなかなか進んでいない。

○ 備前焼の作家との連携はどうか。今後も継続して行うのか。

● 現在色付けを行い、備前市のカフェにおいてもらうように話を進めており、継続して行う。

○ 課題として取り上げるべきはJRの減便問題。現在昼間は30分に1本から1時間に1本となっているはず。そこで、乗客を増やす手立てを、高校生たちが地域課題として真剣に考えないといけない話であるし、高校にとっても大きな問題である。町にとっても移住者を増やすためには便利さが重要だ。30分が1時間となると地方創生にとっても非常に厳しい。JRはさらに減らすことも考えているだろう。減らされないためにも高校生が本気で考えて取り組んでほしい。

○ 地域協働探究を始めたときは、オンラインという形は想定していなかっただろう。コロナ禍で事業所での就業体験ができない中でも、オンラインで事業所と交流したり校内での就業体験を行ったりと、よく工夫されている。これからは中学生や高校生にいかに関心の魅力を

伝えるかという点で情報発信が重要になってくる。今年度でこの事業は終わるが、今後この取組を継続・発展させるためには、まず問題になるのはお金だろう。地域とつながることにおいて、学校における規制や前例などがあるだろうが、お金のつながりも大事。後援会組織やファンクラブのような連携組織を作っていく必要があると思う。少子化の時代で子どもは地域の宝であり、以前に比べても地域の理解は得られやすい。教員の仕事を増やすかもしれないが、それに対するリターンも十分にあるはず。地域とのつながりをより強くすることに関して、地域の理解を得てお金を集めることも必要ではないか。

- 昨年度から今年度にかけて取組を変えているところもあるとのことだが、効果的に高まっている部分はどこか。また、これらの取組における生徒の変容をどのように教員は受け止めているか。他の学びにどのような効果をもたらせているか。
- 活動の高まりについて、閑谷學の活動の区切りを年度末から年度途中に変更し長期的に探究できる形にしたことで、生徒が地に足をつけてじっくり探究できるようになり、ある一定の成果はあった。以前は年度で途切れてしまうことがあったが、区切りを変えることで生徒につながりを意識させることができるとともに、先輩から引き継ぐことで生徒のやる気にもつながっているように感じる。また、今年度からスタートした地域協働探究について、当初、事業所の協力や活動で出ていく生徒の学びに不安があったが、実際やってみると生徒は生き生きと活動している。さらには、働くことを考える機会ができ、就職活動にも活かされている。来年度は就職希望によらない職場体験の在り方も考えていく。
- 仕事場で働いている大人に人生観や職業観を聞いて、それについて高校生が話をしており意義深い。一方で取り組む生徒の能力や意欲、意気込みにも個人差がある。事前の学習での動機づけが大事だが、どのような準備をさせたうえで外に出しているのか。
- 動機づけに関しては、半年たった今でも正直困っている。どちらかといえば受け身の生徒が9割ほど。当初は相手に失礼のないように、授業の意味や地域に出ていくことのありがたさなどを伝えていたが、なかなか生徒に伝わらない。だからこそ、相手には失礼なところやお叱りをうけることもあるが、今はとにかく外に出すようにして、出した中で生徒自身に感じてもらうようにしている。
- これまでの活動の中で、地域の方の反応の変化は感じるか。
- 事業者の方からは、高校生の姿が知られてよかったという感想をもらっている。高校生以上に、つながることに対して喜びを感じていたようだ。
- 体験を経験に変えることが大事。現場に行けば、ものごとの感じ方など、何かしら変化があるものだ。ただし、高校生は変わったことに気づかないこともあり、そうなると経験にならない。経験として消化するためには、「振り返り・発表・対話」が大事で、今回は対話ができていた。その際、教師による質問や問いかけの回数が多ければ多いほど、生徒は変わったことに気づく。閑谷學や地域協働探究などを上達させるには、教師による問いかけが大事。また、今回の授業のような生徒同士による質問が当たり前になるになれば、地域学における生徒の文化が醸成されていく。それに対して、ルーブリックや成長のイメージの観点で、「問いが立てられる」、「メモを持たずに発表することができる」といった教科教育の中の内容になっている。体験を経験にすることは大事だが、ルーブリックには表れておらず生徒の成長が反映されていない。生徒の変容を見るだけで企業もうれしいし、この活動を続けていくだけでも、この学習の効果が地域全体としてわかってくるはず。あと1～2年継続すると、地域にも学校にも目に見える効果が出てくるだろう。

【協議テーマ】「地域協働探究」が持続可能な内容となるための

- ① 学校外（事業所等）とつながる仕組みづくり
- ② 受入先（事業所等）が有益と感じてもらえるための、授業構成などの工夫

〔①における運営指導委員からの意見〕

- ・後援組織を有料で作るのがよい。お金でつながっていれば、一定のつながりができる。インターンシップの実施や、経済同友会が発行している「SDGs マップ」を利用して地域の企業の取材や募集について生徒に深く関与してもらい年々更新できれば、コンテンツでつながることができる。
- ・地域が全体で取り組むべき課題に加わるのが大事。その際、商工会や各種団体と一緒に何かをやるのがよい。また、地域の課題解決において、新見高校における市議会への陳情の取組のように、地域の社会システムや政策決定まで踏み込んでいけば、つながりが深まるだろう。
- ・WIN-WIN の関係を事業所と築くために、ICT を活用し、高校とつながるメリットを公表し公募することで、事業所側からも関わっていききたいという環境づくりを進めること。
- ・コロナ禍でオンライン活用が進んでいることから、地域を拡大して、和気町だけでなく生徒が通っている赤磐市や備前市の事業所とオンラインでつながるとよい。高校が立地していない自治体からすると、高校生にいかに就職してもらえるかが課題である。行政を間に挟んで企業を紹介してもらうことで、高校が立地していない地域の行政課題の解決につながったり、市民とのつながりができるきっかけとなったりする。
- ・安定的に行ける職場として、保育園や老人ホームのような人手不足などの理由で困っているところは、学校と事業所の両者にとって有益である。他に、農業において農繁期に手伝うなども考えられる。また、閑谷学校のガイドが一番良い。恕の精神は和気閑谷高校にしかできない。高校生がガイドしている国宝ということだけで観光資源になる。

〔②における運営指導委員からの意見〕

- ・地元には学校があることに加え、人材の供給が大事。いかに卒業生が地元で就職しているかを、パンフレットやHPにてPRしていくか。また、和気閑谷高校を応援している企業を学校HPに掲載するなど、学校が企業とのつながりを発信することも考えられる。それとは別に、和気閑谷高校の卒業生は就職先で長く就業するというのもPRとなり、企業とのよいつながりとなる。
- ・一例として、商品開発を深めていくこと。県内の高校生の事例として新聞記事に取り上げられることが多い。どこまで企業が有益に思っているかは別として、事例の多さから言っても企業とコラボすることは比較的やりやすいと思われる。現在行っている備前焼の取組も継続してやるのが大事。
- ・地域にどのような人材を輩出できるかにおいて、和気閑谷高校の学びが、生徒卒業後、地域にどのように還元できるのかをアピールできるかが大事。このような観点で、地域・社会にわかるような取組を推進するのがよい。
- ・事業所としても長年同じようなことをすると疲労感がでる。そこで、生徒からの提案や、生徒と若手従業員との対話などを行うことで、従業員なども活気が出て会社の活性化につながるだろう。それを、会社だけでなく地域の広報誌など外に発信することで、多くの人に状況を知ってもらう。取り上げるべき内容としては、JR減便問題など大人の中でも大きな課題がよい。高校生だけ大人目線で解決策を考えて発信することが大切である。
- ・生徒が与えられた仕事を行う中で、改善提案を行ったり、いろいろ感じたことを指摘したりすること。若い人が感じたことは、事業所にとっても業務改善につながるだろう。

[その他、運営指導委員からの意見]

- ・①、②のベースとして、職場に出す学校側が人生観・職業観をしっかりとつことが大事である。「仕事＝職業名」ではないはず。将来、今ある仕事の半分が AI にとって代わると言われている今、学校現場で、どんな仕事に就きたいかに対して職業名を言わせているのではだめ。オードリー・タンが、将来の仕事は何かと聞かれた際、「それはスラッシュである」と答えたように、今後は、一つの仕事だけでなく、いろいろな仕事をするようになるだろう。そういう世界に生徒を送り出すという考え方を教師が持ち、ゆるぎないものをもって「だからこの授業が大事だ」と言えない限り、生徒が不安を感じるだろう。このことに加え、この活動を、地域の方に何度も見てもらい、生徒が変わるところを感じてもらうことが必要である。

【第2回運営指導委員会】

(1) 日時

令和4年2月1日(火) 13:15~17:00

(2) 開催形式

Zoomによるビデオ会議

(3) 出席者

・運営指導委員

石原達也、岡山一郎、神崎浩二、徳岡卓也、中山尚美、前田芳男

・和気閑谷高校(指定校)

藤岡隆幸、久常宏栄、神田明夫、福田浩司、荒金恭子、安東真美、柴谷祐人、赤嶋真一、岡本安宜、江森真矢子、松穂亜花音

・岡山県教育庁高校教育課高校魅力化推進室(管理機関)

室貴由輝、神田慶太

(4) 内容

〔第1部〕本事業に係る学習成果発表会(オンライン配信)

〔第2部〕事業説明(本事業における取組の状況)、質疑応答・指導助言

(5) 運営指導委員からの感想・指導助言

- ・地域側からの期待として、探究学習を行う中で、地域の課題を解決する議会陳情のような政策提言ができるようになればよい。
- ・持続可能に関して、クラウドファンディングの活用や、OB等からの定期的な資金提供の仕組みを確立するのがよい。
- ・生徒には、地域を知り地域と一緒にあって取り組み、学校には、地域や企業が必要とする人材を地域と一緒にあって育ててほしい。お互いのメリットが出る形で、地域や企業との関係構築を目指してほしい。
- ・事業を通して学校として何ができるようになったのか、自治体や企業の相互作用によりどのような効果が生まれるのか、自治体や企業からどのように資金や資源を調達できるようになるのかを整理して明らかにすることが持続可能につながるポイントである。
- ・地方創生に必要な若者の環流を進めるための基本は、小・中・高における教育にあり、その中で地域学は有効に働く。地域学を高校生が学ぶことを、地域も望んでいる。地域学を当たり前に行う雰囲気作りを高校と自治体と一緒にやるのが大事である。
- ・「学んで思わざれば則ち罔し。思ひて学ばざれば則ち殆し」という論語を胸に、地域の方との対話ができ、現場に出る教育活動を堂々としてほしい。

事務局：地域協働プロジェクト推進委員会

氏名	職名	氏名	職名
久常 宏栄	教頭	浮田 圭一郎	教諭（研究開発室長）
神田 明夫	事務長	真野 高行	教諭（探究学習委員会）
福田 浩司	主幹教諭	松本 拓磨	教諭（探究学習委員会）
荒金 恭子	指導教諭(学習センター長)	西山 有紀	総括主幹
安東 真美	教諭（企画主任）	江森 真矢子	カリキュラム開発等専門家
柴谷 祐人	教諭（小中高接続部会）	梅村 竜矢	カリキュラム開発等専門家
赤島 真一	教諭（産学官連携部会）	松穂 亜花音	地域協働学習実施支援員
岡本 安宜	教諭（高大接続部会）	中村 哲也	地域コーディネーター

令和3年度
文部科学省事業
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）
研究開発実施報告書（第3年次）

令和4年3月発行

発行者 岡山県立和気閑谷高等学校
〒709-0422 岡山県和気郡和気町尺所15
TEL 0869(93)1188 FAX 0869(93)1010

印刷所 旭総合印刷株式会社
〒700-0824 岡山県岡山市北区内山下2丁目10-3
TEL 086(232)3311 FAX 086(232)1333